

特選

社会に必要な人であれ

大分市 光吉台光寿会
広瀬 健 二一(85歳)

リタイアした老後のあり方は、今まで生かされた天地諸々の大恩に感謝し報いることであり、そのすべは、われわれを取り巻くこの小社会で「必要な人間になること」だと思う。

動物は食を求めて動かなければ死ぬ。人間も動物であるから食うために働くが、豚のように満腹の後はただ寝るといわけにはいかぬ。身体は動かさなくても頭や心を働かすのでなければ生きていく価値はない。それも自分のことよりも先に、

公のこと、相手の立場、他者への配慮などを考える人であって欲しい。

人間は、「尊敬されるか、愛されるか、尽くして尽くされるか」何れかであるという。尊敬されるか、愛されることは難しいことだが、尽くして尽くされることは一般庶民にもできることだ。思われれば思い、尽くされれば尽くす、即ち受けた恩は返すのである。これは、他人のことをまったく顧みない自己中心の考えから相手の立場に立つて考える、即ち他者中心性の人に変わるということである。これを一歩進めて、尽くしても相手から報いを求めないときは奉仕となる。

もともと人間が生きてくるとは、その人を必要とする何かが必要である。必要とされなければ生きていく甲斐がない。われわれの現役時代は、仕事そのものが世のため人のためのものであり、われわれは皆生きる価値のある必要な人間であった。リタイアするには隣保班、自治会、各種サークルなどのそれぞれの地域活動に必要な人となり、有意義な余生を送ることができると思う。

他者中心性は、老人クラブ活動の三大目標「健康・友愛・奉仕」のバックボーンである。クラブ会員は余生を友愛・奉仕で充実しようとするから、その社会では必要な人となる。それはまた必要人の自覚と相俟って、健康にも相乗効果をもたらす。われわれ高齢者は、老人クラブ活動を通じて健康寿命を延ばし、年の功なりのお役に立ちたいと思う。

イアして年金を受ける身となれば、仕事が無くても生きることはできる。しかし、仕事を持たないわれわれのような年金生活者が、社会に必要な人となるためには、友愛、奉仕の精神を持った他者中心性の人間でなければならぬ。老人クラブはそういう人づくりのための格好の場と思う。上部組織や外郭団体による生涯学習指導や他クラブとの交流連携から、友愛・奉仕の精神や活動方法を学び、他者中心の人間性が高まるのである。自己中心性は閉ざされたシステムであるから、外への発展性はないが、他者中心性は開いたシステムであるから少しずつ周りに浸透していく。当然肉体的にも精神的にも有益で健康にプラスとなる。病的三毒といわれる「瞋^{しん}・恚^い・貪^{こん}・痴^ち」は自己中心性の人につく指標であるが、一方逆に他者中心性は、自分はもちろん地域社会のためにも、うつ病防止や孤独死を防ぐなどの効果が期待できるのであ

